ヘーゲル『精神現象学』における物への問い

一橋大学博士課程一年　上田尚徳

本発表はヘーゲル『精神現象学』「Ⅱ知覚　あるいは物と錯覚」と題された章において、彼が物の概念をどのように解釈しているのかを検討することを通じて、彼の観念論的な立場を明らかにすることを目的としたものである。

ヘーゲルが物という概念で前提しているのは、しばしば指摘されるように、アリストテレスの基体の概念である。ヘーゲルによるこの基体の概念の検討から、なぜ彼の観念論の立場を提示することができるのか。その理由は、『精神現象学』特有の方法論に関係している。ヘーゲルは、自らの哲学を提示する際にそれを積極的に提示するのではなく、寧ろ論駁すべき議論を批判的に検討しその議論を自壊させることで、自らの哲学を明らかにする。それゆえに、実在論的な物の概念（物は意識とは関係なくそれだけでひとつで存在する、という考え方）についてのヘーゲルの議論を検討することによって、それに対立するヘーゲルの観念論的な立場を明らかにすることが可能となるのである。

それゆえ本発表では、ヘーゲルの叙述に即して、物の実在論的な立場の検討しその立場の欠陥を指摘することで、最終的に彼の観念論的な物の概念を提示する、というステップを取った。以下でその内実を簡単に振り返りたい。

まずヘーゲルは物の概念の捉え方がふたつ存在すると指摘する。第一に、様々な性質が集合することによって物が形成されているという「もまた」モデル、第二に物が性質には還元され得ない基体として存在しているという「一者」モデルのふたつである。しかしヘーゲルによれば、この二つのモデルとも物と性質の関係を適切に捉えることができず不十分である。この問題を解決するために、性質とは意識において生じるものであり、物は性質とは関係なく存在している、と考える思考モデルが検討される（こう考えれば物と性質の関係自体を問題にしなくてよいからである）。しかし、この思考モデルも不合理なものとなる。というのも、このモデルを突き詰めていくと最終的に、物は性質のことであり意識がそれらの性質を取りまとめることによって物となる、という考えに帰着し、実在論的な物概念を維持することが不可能となってしまうからである。

以上の議論を受け、ヘーゲルは物を捉えるためには次のように考えざるを得ない、と主張する。すなわち、物とは、あれでもなくこれでもないといった形で、性質に還元され得ないものとして意識によって否定的に措定されることによって、すなわち意識の作用によって見出される、仮構的対象のことである、と。換言すれば、物とはつねに意識の作用なしにはありえないものなのであり、それゆえに、物とは観念論的に捉えられなければならないものなのである。このような考え方はアリストテレス的な物の

概念に対する批判となっている。というのも、基体とは性質に還元され得ないものなのではなく、「還元され得ないもの」として見出される限りにおいて捉えられるものであるからである。以上の議論から、ヘーゲルによる観念論的な物の概念を明らかにした。

質疑では様々な質問をいただいた。その中でも検討すべき質問は、物の概念ということで「Ⅱ知覚」を取り上げているが、これは『精神現象学』の他の部分でも妥当するものであるのか、というものだ。確かに、『精神現象学』には他にも主人と奴隷の箇所や有機体の箇所、さらには啓蒙の箇所等に物という概念が登場し重要な役割を果たしており、それぞれ検討されるべき主題だ。発表者はそれらの検討によって物の観念論的な側面が明らかになると考えている。これについては今後の重要な課題としたい。